

棚田・段畑の利用および基盤の変容 に関する考察

真田 純子¹

¹正会員 徳島大学大学院助教 ソシオテクノサイエンス研究部（〒770-8506 徳島市南常三島町2-1）

E-mail:sanajun@ce.tokushima-u.ac.jp

中山間地の生活の姿が形として現れた棚田や段畑は、文化的景観等の価値が認められつつある。しかしながら、これらは生活の姿である以上、生活が変化した結果、利用の変化による耕作物の変更、あるいは棚田や段畑そのものの基盤に変更が加えられつつある。本稿では、その変化の事例をいくつか紹介し、変化の意味するところについて考察したい。それにより、文化的景観として守るべきものは何か、変化させて良いものは何かについて考察を展開する材料としたい。

Key Words : rice terraces, terraced field, retaining wall of stone

1. はじめに

文化財保護法によれば、文化的景観とは「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と定義されている。

つまり、その土地における生活の様子が風景という形となって現れているものと理解できる。しかしながらここで注目したいのは、この定義が「形成された景観地」と、過去形で書かれていることである。

私たちの生活は、時代とともに変化する。したがって、単に「その土地における生活の様子が風景という形となって現れているもの」と理解するならば、生活が変われば景観も変化するの当然である。が、生活によって形成されたという「結果」を重視するならば、ある時点で固定された景観を文化的景観と呼ぶことになる。しかし、そのように固定してしまえば、それはすでに生活の姿を反映しているとは言えず、真の意味での「文化的景観」ではなくなってしまう。

実際、文化財として保全される「重要文化的景観」では、現状を変更することが制限され、景観を「固定する」ことを是としている制度となっている。

本稿では、文化的景観のなかでも特に棚田や段畑に注目し、それが変化している事例をとりあげ、変化の意味するところについて考察したい。それにより、文化的景観として守るべきものは何か、変化させて良いものは何かについて考察を展開する材料としたい。

2. 棚田・段畑に見られるさまざまな変化

ここでは、さまざまな変化をまずは大きく「基盤の変化」「耕作物の変化」「管理の変化」に分けたうえで、それぞれについて事例を挙げていく。その上で、景観的な変化や耕作意欲の変化に着目し、考察する。

(1) 基盤の変化

(a) コンクリート擁壁への変更

石積みだった耕作地の擁壁を、コンクリート擁壁（型枠あるいはブロック）に変更することがある（図-1 上段左）。施工業者に依頼して修復する場合、このような変化が起こることが多いと思われる。景観的には変化が大きいが、お金をかけて修復しているため、変化が起こった時点では耕作を続けたいという意志があったことが推測できる。

(b) 練り石積みへの変更

実質的にはコンクリート擁壁であるが、景観的には石積みに近く見せている（図-1 上段中・右）。だが、この工法も施工業者に依頼して修復することが一般的になるため、石材が地場のものと違うこと、目地が埋まることなどから、一連の風景の中で見ると違和感はぬぐえない。ただこれもお金をかけて修復しているため、耕作を続けたいという意志が起こさせた変化であると言える。その点では、生活のありようが形になって現れているものである。

(c) 地場の石にコンクリートを追加

この方法は、畦（天端）の部分をコンクリートで固め



図-1 さまざまな変化の事例

る方法、あるいは崩れそうな空石積みの隙間にコンクリートやモルタルを詰め込む方法などが見られる（図-1 中段左）。景観的には大きな変化は無く、また耕作を続けたいという意志も感じられるが、従来の空石積みのような再生可能性は少し失われている。

(d)擁壁の付加

崩れそうな擁壁の手前に、新たに擁壁を付け加えている例がある（図-1 中段中）。新たに積んでいるものは練り石積みで、景観的には多少目立つ。また耕作面積が狭くなるため、かつて中山間地で出来るだけ耕作地を確保したいと考えていた頃とは、耕作に対する意欲あるいは耕作の必要性が減少した結果の現象であると言える。

(e)作業道の設置・拡幅

作業道の設置は、たとえば白糸台地などで見られる事例である（図-1 中段右）。営農を目的とした改修である。また、景観的には影響を極力抑えるように工夫がしてある。

作業道の拡幅は、かつて耕作地を最大限にとるために

必要最小限の幅の作業道をつけていたものを、利用の変化等から拡幅しているものである。プロポーシオンが異なっているだけなので、景観的には言われなければ気づくことはないと考えられる。

しかしながらこれも、耕作に対する意欲あるいは耕作の必要性が減少した結果の現象であると言える。ただ、こうした生活のありようの変化がそのまま形（景観）になって現れていると言うこともできる。

(f)擁壁の傾斜変更

かつて、耕作地を最大限とりたかった頃には、擁壁を垂直に近くする、あるいは寺勾配などをつけてオーバーハングさせるようにして擁壁を作っていた。しかし、維持管理の手間を省くため（修復の間隔をなるべく長くするため）、擁壁をすこし寝かすようにして積み直している例がある。石積みの棚田、段畑という点では景観的に変化は無いが、環境と生活の作り出す迫力や緊張感に欠ける景観となる。またこれも耕作面積の減少を引き起こすため、耕作に対する意欲あるいは耕作の必要性が減少

した結果の現象であると言える。ただこれも、そうした生活の変化が形に表れているものである。

(2) 耕作物の変化

(a) 耕作放棄

耕作が放棄された田畑である（図-1 下段左）。耕作はしないが草刈りはしているところ、草や灌木などが生えるのをそのままにしているところなどがある。前者は、景観的にはそれほど影響はないが、後者は、地域の景観の棄損につながる。耕作意欲の点では、無くなっている状態である。

(b) 樹木の植栽

樹木の植栽では、杉など後に売ることを考えて植えた植栽（図-1 下段中）と、桜など景観木を植えあらたな観光資源にしようとするもの（図-1 中段左）、あるいは実のなる木を植えて畑よりは手間をかけずに収穫の得られる耕作地にしようとするものがある。

杉などの植栽は、ほぼ森に帰るため、景観が失われると考えて良い。花や果樹は、利用形態が変わっただけで、棚田や段畑の基盤は見えるため、その雰囲気はある程度残る。耕作意欲の点では、実のなる木以外は、無くなっている状態である。また、こうした樹木は、段状の耕作地に植える必要性は必ずしもないため、生活（利用）と空間的特徴の結びつきはほぼ失われていると言える。

(c) 水田から畑へ

中山間地では、畑は耕作面が斜面になっていることが多い。そのため、基盤整備をやり替えない限り畑から水田に変わることはほとんど無いが、水路の管理が出来なくなった、水源が失われた、水田の維持管理が大変、などの理由で畑に変更されることがある。

もともと段畑の中に点在する水田であれば、景観的にはあまり変化はないといえる。ただ、棚田が特徴的な景

観の地区では、自家用に多品種を少量植えるような利用だと景観の棄損につながるおそれがある。また、畑になることでビニールハウスなどが建てられた場合にも景観が大きく変化する。

(3) 管理の変化

(a) 公的な管理

能登にある白米の千枚田では、古くから名勝に指定されてきたこともあって、耕作地の一部が公的な管理にゆだねられている。こうすることによって、景観的には変化は無いが、そこで食料を得るという生活とその現れであったはずの景観には、結びつきが無くなっている。

(b) オーナー制度

耕作を維持するために、棚田等ではオーナー制度を導入しているところがある。基盤も耕作物も変更はないため、景観的には維持される。基盤の維持管理までは手が回らないため、長期的に見れば維持可能な状態にあるか課題が残るが、短期的には景観は維持されている。ただし、こうした耕作では、体験が主となるため、生活とその現れである景観の結びつきは少し弱いと言える。

3. まとめ

以上、棚田・段畑に見られるさまざまな変化を概観し、景観的な変化や耕作意欲の変化を見てきた。また、それらから「人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地」という文化的景観の定義に合わせ、生活のありようとその形（景観）の必然性について考察した。以上を下表のようにまとめる。

結果としての景観を保全するあまり、「生活」と切り離されている例もあることがわかる

(2014. 4. 7受付)

表-1 棚田・段畑の変化とその影響、意味

	変化	景観の 保全	生活の 継続性	生活と景観 の結びつき	備考
基盤 の 変化	コンクリート擁壁に	×	◎	○	営農の意欲からくる変化
	練り石積み擁壁に	△	◎	○	営農の意欲からくる変化
	天端にコンクリート	○	◎	○	営農の意欲からくる変化
	既存石積みにコンクリート詰め	○	◎	○	営農の意欲からくる変化
	擁壁の追加	△	△	○	営農の意欲は減少しているが、それが現れた景観
	作業道の設置	○	△	○	営農の意欲は減少しているが、それが現れた景観
	作業道の拡張	◎	△	○	営農の意欲は減少しているが、それが現れた景観
	擁壁の傾斜変更	○	△	○	営農の意欲は減少しているが、それが現れた景観
耕作 物 の 変化	耕作放棄	△	×	○	営農の意欲は無くなっているが、それが現れた景観
	樹木の植栽（杉など）	×	×	○	営農の意欲は無くなっているが、それが現れた景観
	樹木の植栽（花など景観木）	△	×	△	石積みは見えるが、利用形態との必然性に欠ける
	樹木の植栽（果樹）	△	△	△	石積みは見えるが、利用形態との必然性に欠ける
	水田から畑へ（棚田地区）	△	○	○	利用（生活）の変化が現れている景観
	水田から畑へ（施設栽培）	×	○	○	利用（生活）の変化が現れている景観
管理 の 変化	公的な管理	◎	×	×	利用（生活）が無くなっているが、景観が存在
	オーナー制	◎	△	△	利用（生活）は弱まっているが、景観は存在